

小中一貫校 南アルプス市立白根飯野小学校令和5年度後期学校関係者評価書

【学校関係者評価委員会】

- 1 実施日 令和6年1月19日
- 2 会場 白根飯野小学校図書室
- 3 参加者

(1) 学校関係者評価委員

NO	氏名	役職
1	市川 和郎	元校長・学校評議員
2	飯野 久	学校評議員・南アルプス市議会議員
3	飯田 哲夫	元校長・学校評議員
4	森本 優作	学校評議員・PTA 会長
5	浅利 武仁	飯丘地区自治会長

(2) 学校職員（3名）

NO	氏名	役職	備考
1	河住 悦久	校長	本校在籍2年目
2	瀧澤 智子	教頭	本校在籍1年目／事務局
3	中島 則雄	教務主任	本校在籍1年目

4 学校から提案した内容

- (1) 教職員による後期自己評価アンケートの状況
- (2) 学校生活に関する後期保護者アンケートの状況
- (3) 学校生活に関する後期児童アンケートの状況
- (4) 白根飯野小学校後期自己評価書（アンケートの分析及び改善方策について）

5 学校関係者評価委員会報告概要

本校の学校評価は、学校教育目標の実現（学校経営方針の実現に向けた本年度の努力点）のための取組状況を、教職員による自己評価に加え、保護者と児童によるアンケート調査結果を活用する中で、それぞれの立場を踏まえるとともに、これらに関わる設問に寄せられた意見や、日常的に行っている児童観察も加味して分析し考えている。

なお、今回の調査は2学期の取組が根拠となる。

[1] 評価基準

全体傾向を把握するため、AB評価を肯定的評価とし、それらの合計が、80%を超えている場合は『満足できる状況』と判断した。また、CD評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は『改善の余地がある状況』と判断した。

(A: そう思う B: だいたい思う C: あまり思わない D: そう思わない E: わからない)

[2] 各項目の分析

(1) 確かな学力について

2学期は、南アルプス市指定研究校、山梨県総合教育センター指定推進校として、公開研究会が11月に行われた。校内研究のテーマ「対話し、学び、わかちあう子どもの育成～指導と評価の一体化を通して～」を軸に、児童間の関わりを基盤とし、学習プロセスや言語活動を重視した授業展開によって、主体的・対話的で深い学びの実現を図り、学習指導要領で示される資質・能力の育成に取り組んできた。特にICTの活用や、指導と評価の一体化を目指してきた。

教職員自己評価の結果を見ると前期に比べ、すべての項目が肯定的な回答となっている。特に「児童が友達の考えや感想に耳を傾け、多様な考えを大切にされた対話的な深い学習を創造することができたか」、「ペア学習、グループ学習を有効的に取り入れ、伝え、聞くなど言語活動を充実させることができたか」の2項目については、肯定率が前期に比べ高く、教職員全体で意識をして取り組んだ成果と考えられる。特に教職員間の学びが、公開研究会によって、積極的に幅広く取り組みができたことや、授業づくりや学級づくりなど、教職員間の共通理解を深め、実践を進めることができた。

保護者の回答では、前期と同様「4子どもは、家庭でも宿題や自主学習・読書など学習する習慣がついている。(83%)」の項目で、他の項目と比較して低い肯定的回答となっている。家庭学習の習慣化や充実をめざし、「家学がんばり習慣」にも継続的な取組を行ってきたが、今後も継続して学校と家庭が連携を図りながら取組を進めていく必要がある。端末の持ち帰りも冬季休業中、全学年で行った。引き続き家庭学習の一助として端末の使用も計画的に行っていきたい。

(2) 豊かな心について

教職員は、すべての項目において90%以上の肯定評価が得られた。特に前期に比べ飛躍的に伸びた項目は「上学年の子どもの活動から、下学年の子どもが自ずと学べる縦割り活動の確立に向け、適切な指導助言ができたか。」である。運動会や縦割り活動などの児童会活動の中で、教職員が6年生のリーダー性を育む指導を意識して行った結果だと考えられる。新型コロナで活動が制限されていたが2学期は異学年との交流を積極的に行うことができたことも要因と考えられる。今後も縦割り活動を充実させて、高学年としてのリーダー性を育む機会を設定していきたい。

その一方で、前期と同様「居場所づくり」や「好感を与える所作や言動、挨拶」では引き続き課題が残っている。教職員の意見には「悪口を聞かない日が一日もありません。児童の心を育てる教育の必要性を感じます。」「きちんと挨拶できる児童を、もっと増やしたいと思

う。児童会での取り組みや、日々の声掛けを諦めずに続けていきたい。」「人に不快感を与える言動をする児童もまだ多い。毎日の学習や生活について充実感を持って過ごせるように考えて行きたいと思う。」等、子どもたちへの言語指導と心の育成について挙げられた。また、否定的回答が増えた評価項目となったのが「読書について」である。意見の中にも「読書が苦手、あるいは興味がない児童は読み聞かせの時間も友達と話していて、がっかりした気持ちになります。」とあった。根気よくじっくり本を読んだり、人の話を聞いたりすることが苦手な児童もいる。授業において多くの本に触れさせる機会を増やしたり、読み聞かせ等の工夫を継続したり、保護者への啓発を繰り返し取り組んでいく必要がある。読書や話を聞く態度（姿勢）は、学校の指導だけでなく、家庭での協力も不可欠である。さらに、学校は「公共の場」であることも意識した取り組みを教職員の共通理解のもと、実践していく必要がある。

保護者の評価においても「①子どもは、白根飯野小学校に楽しく通学している。」(99%)「②子どもは、仲間と協力し、行事や活動に粘り強く取り組んでいる。」(97%)、「⑥子どもは、人の心を思いやり、豊かな心を育てている。」(94%)「⑤子どもは、学校・学年・学級で理解され、心の居場所を持っている。」(97%)、「⑥子どもは、人の心を思いやり、豊かな心を育てている。」(95%)といずれも高い評価を得た。この結果からも、前期同様いじめ防止へのきめ細かな対応により子どもたちが自分の存在価値を自覚し、学校生活を送っていることに対して評価されていることが伺える。

(3) 健やかな体について

教職員自己評価において、「1 運動の苦手な子どもも自己の進歩や達成感を味わわせ、運動習慣を育むことができたか。」「2 日常的な運動・食事・睡眠と健康について理解を深め、健康な生活習慣を育むことができたか。」の両項目とも100%の肯定的な評価となった。また保護者の評価においても、「10 子どもは安全を意識して登下校している。」(96%)、「12 御家庭では、早寝・早起き・朝ごはんに取り組んでいる。」(95%)の項目についても肯定的な評価が高い結果となっている。特に2年間の取り組み実績のある「アウトメディア」の取り組みは、保護者の協力のもと実施することができている。こうした取り組みが今年度「全国健康づくり推進校 優良校」として飯野小が選ばれ、表彰されることとなった。今後も家庭や地域と連携を図りながら、取組を継続していくことが大切である。

(4) グローバルに活躍する人材について

教職員自己評価においてすべて肯定的な評価が高い項目となっている。前期、「①児童が、学ぶことを通して、自己や他者の良さ、人として生きる良さに気づき、進んで社会と関わる意欲や態度を育むことができたか。」の項目は77%と低い評価となっていたが、後期は95%になり肯定的な評価に転じた。グローバル社会を生き抜く人材を育成するために自ら学び、学び合い、協働して行くことを学ぶための授業づくり、行事、体験活動の実践を行っていると考えられる。ALTの先生と外国語専科の先生により、外国語が楽しい授業内容になっており、子どもたちも楽しく参加できていることが考えられる。引き続きグローバルに活躍する人材の育成を意識した教育課程の編成や、体験的な活動を増やし、思いやりの心を育む取り

組みを行っていききたい。

(5) 特別支援教育の推進について

教職員が肯定評価したものは、4項目中すべての項目であった。特別支援教育コーディネーターを中心とし、校内支援委員会やケース会議を開催し、情報共有と指導・支援内容の相談・確認を行っている。個々のニーズに応じた指導や支援ができるよう、積極的に関係機関（スクールカウンセラー、市の子育て支援課、アドバンスティーチャー、デイサービス等）とも連携を図りながら対応してきた結果であると考えられる。

特別支援学級だけでなく、通常学級においても課題を抱え、それぞれの特性に応じた支援が必要となる児童が増えてきている状況ではある。授業中、離席を繰り返し、教室を出てしまう児童もいる。職員の支援体制にも限界はあるが、今後も全職員で情報を共有しながら、個に応じた支援・指導や「居場所づくり」を引き続き行っていかなければならない。

(6) 保護者・地域との連携と小中一貫校への取り組みについて

教職員自己評価の「①適切な情報発信等を通して、保護者・地域との共通理解を図るとともに、その力を活用し、ともに支えあう地域の学校づくりに努めることができたか。」(100%)、また保護者アンケート「⑦学校は、情報発信（連絡帳、おたより、ホームページ等）として、子どもの教育活動を伝えている。」(98%)の結果より、学校と保護者との情報共有や連携はよくとれていると考えられる。今後も継続して、適切な情報を発信することで、保護者や地域との連携を深めていきたい。

P T A活動に関する評価では、教職員自己評価の「P T A活動等を通して、保護者との協力関係を築くように努めることができたか。」(100%)の項目の評価が高い。その一方で保護者のアンケートでは、「14 P T A活動に進んで参加している。」(22%)と「15 お子さんを地域の行事に参加させている。」(25%)の2項目で前期と同様に否定的評価となった。だが、地域への行事に参加したと答えた保護者が若干増えたことと、前期の意見にあった「地域の行事があるのかわからない」という意見がなくなったことは良い結果と考える。引き続き保護者・地域社会と連携・協働しながら「地域と共に育てる飯野っ子」を合言葉に、社会に開かれた教育課程の充実を図っていききたい。

保護者アンケート「16 小中一貫校として、3校（白根巨摩中、白根飯野小、白根東小）が連携して取り組み教科指導を行っていることを理解している。」(90%)が前期と比べて高い肯定的評価となった。3校合同での年3回の研究会を開始し、白根巨摩中学校を中心に、白根東小学校と3校で連携しながら教育活動を進めている。今年度も、挨拶運動、陸上指導、合唱交流、清掃など少しずつ小中一貫の取り組みが定着してきている。今後も教職員が小中一貫校としての理解を深め、9年間を通して児童生徒を育てているという意識をもちながら、各専門部の取組を確実に進めていくことが求められている。

[3] 学校関係者評価委員の助言等

- 1月に「二十歳の集い」「どんど焼き」等地域の行事があった。参加者が多く地域性が育っていることを感じる。挨拶を率先して行う若者に感動する。その基盤は、小学校でどんな過ごし方をしたかによると思う。地域性を育てる意味でも小学校での友だちとの関わりや、親や地域との関わりを大切にしてほしい。そうした経験が二十歳や親になったときに地域の行事に参加することに繋がっていくと思うので、学校と地域の連携をお願いしたい。

- 2回目の評価により、課題や成果からアプローチの仕方がわかる。グループ活動や縦割り活動により子どもたちが、学校が楽しくなったと感じたり、様々な行事を通して人との関わりが楽しいと感じたりしているところが成果である。学校をよく知り、現場を知っている先生方が、この評価項目の成果を是非周知して活用してほしい。

- アウトメディアは、保護者の協力があったことだと思う。飯野小の特色としても素晴らしいことなので是非広めてほしい。

- ICTの活用やAIの発展もよいが、個別最適な学習を考えると、それぞれの子どもたちに目標があって、目標によって多様な学びへ変わっていくと思う。ただ、経験や感覚を磨くことや自然と人と関わるのが大切なので、学校教育の中では是非取り組んでほしい。

- 児童アンケートで、項目2「授業中友達の話をよく聞いて、自分の考えを伝えているか」項目4「相手のことを考えた挨拶や返事ができますか」項目5「先生や友達の話をしっかり聞けますか」の項目で、高学年が悪くなっていくのが気になる。特に「全然できていない」という回答している児童は、当たり前でできてほしいことが、できていないということが心配である。今後も引き続き指導していく必要がある。

- 他県でPTAが解散したという報道も聞く。親も役員になることを嫌がり、個人主義的な考えを持つ親も多い。コロナ禍で失われたものが色々と復活しているが、心が凍結している感じがする。タブレットの使い方も様々で、犯罪につながる報道もある。SNS等規制が難しい現状もあるが、大人がモラルを守らない。人の子を預かる先生は気苦労が多いと思うが、様々な対応をしていただき感謝している。